

夜と霧

生と死

岩手県立盛岡第一高等学校

一年

山崎 やまざき 詩織 しおり

「生きる」意味とは何か。「夜と霧」を読

みながら、私は自分に何度もそう問いかけた。

この本は、ナチスによるホロコーストについ

て書かれたものである。以前の私は、ホロコ

ーストという単語を聞くと、真先に「死

を連想した。しかし、この本を読み終わっ

た今、ホロコーストと聞いて私の心に浮かぶの

は、「生」である。多くの人は、これを聞い

て驚くだろう。なぜなら、一般的に、生と死

は対峙するものとされてきているからだ。しか

果たしてそうだろうか。

ナチスによるホロコーストという、人類の

負の歴史を前にして、大勢の犠牲者はかわい

そうだと同情しただけで満足してしまちな

どということは、あってはならないと思う。

私たちには同情する権利すらないのではない

か、とさえ感じる。実際にホロコーストを経

験していない私たちが、それを理解したつもりになることが、最も危険なのではないか。実際に筆者は、生き延びた元被収容者たちが、収容所にいたことのない人々に自分たちの気持ちや伝わるように話すなど、到底無理だ^トと言うのをよく耳にした、と記している。そんな当事者たちの複雑な心境・経験を、経験者自らが客観的な立場に立って、心理学的に分析することで完成した『夜と霧』は、画期的だと思う。並大抵の人には、生き地獄のような収容所生活の中で他人の心情に気を配ることはできないだろう。ましてや、自身自身の心を第三者の立場から冷静に分析することなどは、不可能に近いと思う。筆者自身、本当に強い精神の持ち主だ^トたに違いない。私たちには難しい、元被収容者たちの経験を、心理学的な側面から一般化することで理解可能にしたのが、この本だ^トと思う。

つまり、私たちはこの本のおかげで、ホロコーストの犠牲者に対してうわべの同情をす

るのではなく、彼らの経験から私たちの生活に役立つことを学ぶことができるのだ。

筆者が記した、彼自身の収容所での日々は、信じられないほどの苦しみの連続で、常に死と隣り合わせだった彼の姿がありありと目に浮かぶ。そのような状況下で、おおかたの被収容者たちが、収容所を生きしのぐことができるかを最重要とし、もし生きしのげないならこの苦しみをすべてに意味がない、と考えたのは自然なことだと思う。私が彼らの立場に

あつたとしたら、すべては生きのびるための苦しみだ、と間違いなく彼らと同じ考え方をするだろう。

しかし驚くべきことに、このとき筆者は、彼を取り巻くすべての死や苦しみに意味があるかどうかを重視し、もしもそれが無意味ならば収容所を生きしのぐことにも意味などない、とおおかたの被収容者とは真逆の考えをもっていたというのだ。最初、私は彼の考え方をよく理解できず戸惑った。それでも、何

度も本文を読み返すうちに、彼の考え方に共感するようになった。彼はつまり、収容所から抜け出せるかどうかなどという、運に左右される生は、そもそも生きるに値しないと考えたのである。

また、死や苦しみに対しての向き合い方について書かれている箇所もあった。ここで強く印象に残っているのは、「苦しみを尽くす」という言葉である。普通、苦しみをできるだけ経験しないように避けられる。それゆえ、

私は今まで「苦しみを尽くそう」と言う人に出会ったことがない。だからこそ、この言葉は私にとって新鮮だった。それは清々しい朝の大气のように、私の心を澄みわたらせた。「苦しみを尽くす」とは、私たちに与えられた苦しみを責務として捉え、苦しむことになにかを成し遂げることなのだ。

運命は人間を苦しめる。誰一人として他人と同じ運命をもつ人はいない。すなわち、運命が人それぞれならば、苦しみも人それぞれ

なのだ。自分に与えられた苦しみをとことん
苦しむことができないのは自分しかない、と
いうのは本当にその通りだと思う。例え他人
の助けを借りようとも、最後にその苦しみを
乗り越えるのは自分だからだ。苦しみと向き
合い、それを責務として捉えることで、[「]わ
たし[」]という存在を感じることに。これは、死
お苦しみを避け続けることと比べて、遥かに
大きな生きる力、そして自信を、私たちに与
えてくれるだろう。

このように、「生きること」は、死や苦し
みに意味があつてこそ、それ自身にも意味を
もつ。そして、死や苦しみと向き合うことは、
自分という存在のかけがえのなさを改めて自
覚し、生きるための原動力となる。
つまり、生と死・苦しみはお互いに強く結
びついている。それらは対立するものではな
く、生きることの意味は苦しむことと死ぬこ
とを含むのだ。死・苦しみを受け入れてこそ
人間は生きられるのだ、と私は思う。